

年始がすぎて

小野澤繁雄

年始がすぎて日に日に寒くなってもきたが、ところで同時にその寒さにもようやく慣れてきたと
いった日々だ。ひざしがつよい昼間はとくに明るさを感じる。

日を次いで、昼と朝とにわずかの降雪があった。空高く巻きあがってゆく煙のような雲や、ペラ
ンダから手を延ばせば触れることができるくらいに近く、明暗のハッキリした雲があったりと荒天
の方が空がきれいだったりする。

東側の川（市野川）のほとりは川が風の通り道になっていて、寒い日は寒い。このところは、南
側の川（新江川、都幾川）の段丘上に、街歩き場所を変えている。

晴れていれば、正面に富士山がみえていて、とくに年始には合うようだ。

そんなある日、新江川にむかって下り坂をくだっていたときのことだ。芭蕉句碑の案内標識がめ
にとまった。梨畑の角で、交差路だから案内が出ていたのだろう。

探し歩いてみたが、百メートルの間にはどうしてもみつからない。

ちよと歩いてきた近所の人らしい女性に聞くことにしたが、目印になるものがない、何もな
いような畑みちだから、失礼ながら大雑把な云われようで、その通り探すしかない。

それでももうろうとした挙句、縁石にU字ブロックを置いただけの踏み台に、一段上がった梨畑の
中、松の木が取り合わさって、腰高の（土台石付き）石碑の所在はしれた。

それで、肝心の句だが、これが読めない。苔むしてと云いたいところだが、じぶんには、とい
うか、読めない。説明も付いていない。

それでも、芭蕉ということでもあるし、（帰宅してから）検索してみることにした。

名月の花かとみえて綿島

句碑は、関根さんという人（梨畑の所有者だった人？）が、芭蕉の二百回忌を記念して建立した
もので、建立した明治二十八年当時、このあたりは畑一面に綿花が栽培されていた、という。

この句（元禄七年、伊賀上野での作）は、余所でも句碑になっているようだ。句意は、これも引
き写しながら次のよう。

広い綿島一面に、熟しきった綿の実が白い綿を吹きだしている。それが明るく冴えた名月の光を
浴びて、白い花かと疑われるほど美しい。

こういうことがある。俳句熱というのは一時期そうとうなものがあったようで、普通の人（？）が、
句碑を建立していたりする。

ここに遠くない場所の、庭にウルトラマンを建てていた家があったことは知っているが。じつはこのあとで、夕刻、ここに近い町内を歩いていて、綿の実が白く下がっているのをみたことがあって、これは一株だったが、夕闇にふあーとたしかに花が浮き出ているようだった。すぐに綿かなと思ったので、近い道沿いにいた女性に確認してもらっている。

綿花、はテレビでみたことがあるかぎり、綿は、学生の頃、港のバイトではしけ岸の倉庫に運びこむ作業をしたことはあった。畑でこんな風に綿の実をみるのは初めてのようだった。そこで、書いてみた歌、

畑すみの枯れ枯れとする枝先に下って塊は綿かな白し

明治中頃のこのあたり一面の綿畠を思い描いてみる。

「清紫会」だより

- ◆第149回 平成二十八年十一月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
(提出作品) 林博子・背広の丈
- ◆第150回 十二月十五日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
(提出作品) 市川茂子・料理の本を見て／林博子・のすたるじあ／松井淑子・買い物帰りに
- ◆第151回 平成二十九年一月十九日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室
(提出作品) 市川茂子・目の前が変わる／小野澤繁雄・年始がすぎて

(松井)